



〔新版〕議事堂の石

工藤 晃・大森昌衛・牛来正夫・中井 均
 (株)新日本出版
 A5版, 158ページ
 定価1500円(税別)

本書の初版は1982年に出版されたもので、後に増刷されている名著である。

近寄りがたい雰囲気をつたえた国会議事堂が、建築計画から設計の懸賞募集、いくたの葛藤を経て完成に至るまでの歴史が関係者の証言を含め、社会・政治背景とともに語られている。新版のカバーにかけられた帯のキャッチフレーズには、次の言葉が綴られており、本書の特徴が言い尽くされている。「国会議事堂の素顔、および石の博物館・国会議事堂の建築秘話。全国の名石を結集した、またとない石の大建築—国会議事堂。計画から竣工まで50年の歴史、議事堂建設をめぐる秘話を興味深く語り、議事堂の石を豊富な写真で紹介。新事実と物語を加えカラー写真も増補した最新版!」。

初版では大森 昌衛氏が協力者として記され、本文は148ページであった。新版では執筆者になられ158ページに増え、次の構成になっている。

一 議事堂の建築

- 1 計画から竣工まで五〇年
◆石材は富士山の三〇倍の高さ
- 2 建築デザイン設計の懸賞募集
◆欧米諸国のコンクール
- 3 日本の石材の博物館
◆手磨きでみがきあげられた議事堂の石
- 4 石工の生活
◆日本の石工とマルクスの「資本論」

二 議事堂の石材案内

- 1 外装の石材
◆石材名・岩石名・産地のラベルを
- 2 内装に使われている大理石
◆修理にも国産品の基本方針を
- 3 その他の内装石材
◆産地も謎

三 石材ものがたり

- 1 人類と岩石のめぐりあい
- 2 日本の石材
- 3 石材の生い立ち
- 4 石材にさぐる日本列島の歴史

四 議事堂余話

- 1 大理石物語
- 2 東京都庁の輸入石材
- 3 国会移転計画を憂う

付図1～10・付表1～4

◆印の7つの話題は、余白を活用したもので、四の議事堂余話とともに新版に追加された。比較対象となった他の建造物などやそれらの数字は新しく書き換えられた。また、地質学的内容も一部であるが更新されている。

日本の石材調査は農商務省地質局によって行われ、明治22(1889)年「東京建築石材の改良を望む」と巨智部 忠承(1893年地質調査所二代目所長に就任)が地学雑誌に論じたのを端緒とし、以降石材に関する記述が増えている。議事堂建築に国産品を使用する方針がかたまつた1910年頃からは、一村一品運動に似た地場産業の町起こしが展開され、多方面から売込みが盛んになったのであろう。この間の事情は本書の一章に詳しく紹介され、採用された外装および内装材が一覧表などに網羅されている。

二章は、それぞれの石材の設置場所、産地および地質学的特徴が豊富な写真と若干の解説図によってリアルに描写され、なかでもカラー写真は質感を大いに高めている。付図には各石材が議事堂のどんな場所を選んで使用されているかがわかる。すなわち、地下一階、一階、二階および三階における外壁、内壁、柱、階段、暖炉、トイレ、広間、玄関、議場、議長室、大臣室、議員控室などの区別と石材との組み合わせが明示されている。そしてそれぞれの場面がダイナミックに彩られている様子を写真と文でたくみにまとめている。ただ残念なことに、岩石と化石の写真に長さのスケールを欠いている。

外装材の花崗岩は多量に割り石として積み上げ

られているものの、種類が少ないので当然のことながら、記述の核は内装材の石灰岩・大理石と含まれる化石となっている。

三章は、人類と石とのかかわりを石器時代から語り始め、身近な石材一般について、種類別の石材産地や地質の特徴を解説する。4の日本列島の歴史については疑問に思う。1980年代の放散虫などの微化石研究によって、秩父古生層が約1億年若いジュラ紀や白亜紀の中生代の地層であり、石炭紀や二畳紀の化石を含む石灰岩・大理石が礫状の巨大な岩塊であることが判明している。成因に関するプレートテクトニクスや付加体などの仮説への賛否は別として、事実関係には触れてほしかった。

四章は、議事堂に使われた国産石材以外の石灰岩・大理石の代表的使用例、輸入石材で仕上げられた東京都庁、イギリス・フランス・アメリカ・オランダ・イタリアの五か国議事堂の歴史と日本の場合との比較が述べられる。おわりに、首都機能移転の一環としての国会の移転計画に強い危惧の念が表明されている。

本書は、石材一般についても概要が語られていてとてもわかりやすい入門書となっている。著者らが強調するとおり、議事堂は純国産石材によって造られていて、日本の石材博物館といっても過言ではない。特に地質時代の考証に不可欠の化石を豊かに含むこと、現在ではほとんど採集が難しいことなどを思うと、極めて貴重な学術的国有財産ともいえる。

著者らが努力してこられた石材名・岩石名・産地のラベル添付が一日も早く実現されるよう、また日本の石材博物館にふさわしい展示・説明、見学案内用カタログや標本の岩石片を手にとって見たり薄片の偏光顕微鏡観察ができるよう願っている。

竣工後60年経過した国会議事堂外装材の桜みかげの尾立石(広島県倉橋島産)、および25年の最高裁判所の稲田石(茨城県笠間市産)はどちらも厚さ50cm以上の組み積石でできている。輸入の粗粒花崗岩が厚さ5cm程度の薄板状張り石にされた東京都庁舎とはあらゆる意味で対照的である。こ

れらの石材は、ほとんど同質岩石で四方八方の空に突き出ている。新鮮な花崗岩といっても永久不変ではない。同一石材で造られた外装材の花崗岩が、長年月における太陽光線と影・風雪などの外気にさらされている。高度差も加味すると、石材の劣化・風化・変質(aging)、わけても酸性雨を含む汚染大気などの影響は、地球環境問題に基礎的データを提供するにちがいない。国会議事堂の外装材は、そうした経時変化を知るまたとない貴重な自然の暴露試験体という一面を持っている、と私は考えている。

そのようなことも空想しながら、本書を手にも、一日も早く国会の門扉を通して見学に行ってみよう。

なお、国会内の見学手続きが簡単に解説されているが、衆議院のホームページ(www.shugiin.go.jp)の「国会参観の手続き」を開くと、申込方法、連絡先(参観係:03-3581-5111,内線2463)などがわかる。平日、土曜日、日曜日、休日の午前・午後それぞれ3回、約40分の見学コースが準備されている。参議院(www.sangiin.go.jp)の見学は別の連絡先(参観受付係:03-5521-7445)へ。

本書を石材の入門書として、もっと詳しく石材の産地、地質・岩石名区分、用途、劣化・変質・風化、補修・修復などについて詳しく知りたい方は、下記の文献を参考にしてください。

文 献

- 広川 治・小山一郎(1956):日本鉱産誌Ⅶ土木建築材料、V章 石材、工業技術院地質調査所、p.86-293。
 渡辺益国(1987):石屋史の旅。渡辺石彫事務所、392p。
 服部 仁(1991):変貌する石材と廃材-自然の素顔を見せる貴重な資源-。地質ニュース、no.443、p.10-24。口絵写真2ページ。
 地質調査所編(1992):100万分の1日本地質図、第3版:CD-ROM版、数値地質図no.G-1(1995):地質調査所。
 白水晴雄(1992):石のはなし。技報堂出版(株)、214p。
 武井吉一・中山 實(1992):石と建築-材料と工法。鹿島出版会、161p。
 日本列島の地質編集委員会編(1996):理科年表コンピュータグラフィックス「日本列島の地質」CD-ROM付、丸善、139p。
 関 陽太郎ほか12名(1996-97):講座「石造文化財の保存」、第1回-第13回、土と基礎、vol.44、no.8~vol.45、no.9、地盤工学会。
 松浦浩久(1997):倉橋島地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)、地質調査所、53p。

(服部 仁)